

八戸市埋蔵文化財調査報告書第 175 集

八戸市内遺跡発掘調査報告書 41

史跡是川石器時代遺跡

一王寺遺跡史跡内容確認調査概要報告書



令和元年度

青森県八戸市教育委員会

例 言

- 1 本書は、令和元年度に実施した国庫補助事業による八戸市内遺跡発掘調査事業の調査報告書であり、史跡是川石器時代遺跡（一王寺遺跡）内容確認調査の調査概要報告書である。
- 2 本書の執筆・編集は、是川縄文館職員 横山 寛剛が行った。
- 3 遺構名は次の略号を用いて標記した。
SI：竪穴建物跡、SK：土坑、SC：屋外炉、
SX：性格不明遺構
- 4 発掘調査では、次の方々からご指導いただいた（五十音順・敬称略）。
岡村 道雄 高田 和徳 辻 誠一郎
- 5 出土遺物及び各種図版類等は、八戸市教育委員会で保管し、活用を図る予定である。

I. 遺跡の概要（第1図）

本遺跡は八戸市の中心部から南へ約4kmに位置し、新井田川の左岸に立地する。西側の標高70～100mの丘陵と、東側の標高18～44mの新井田川へ向かう緩斜地からなる集落跡である。遺跡の南端は東西方向に走る寺ノ沢、北端には北西から南東に走る長田沢という2つの旧沢地形が確認されている。遺跡の総面積は32万6千㎡である。史跡是川石器時代遺跡は、本遺跡と中居遺跡・堀田遺跡の3遺跡によって構成され、なかでも本遺跡は、北日本の縄文時代前・中期を代表する円筒式土器の標式遺跡であり、前期の円筒下層式と中期の円筒上層式とが初めて層位的に確認された遺跡でもある。

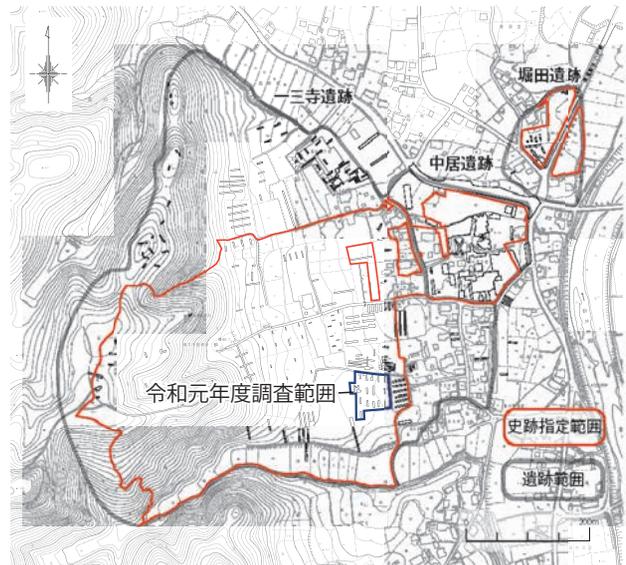
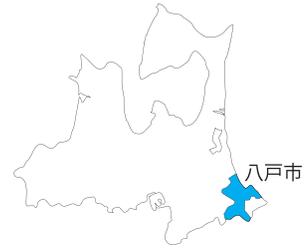
II. 調査に至る経過

(1) 平成7年から29年までの調査

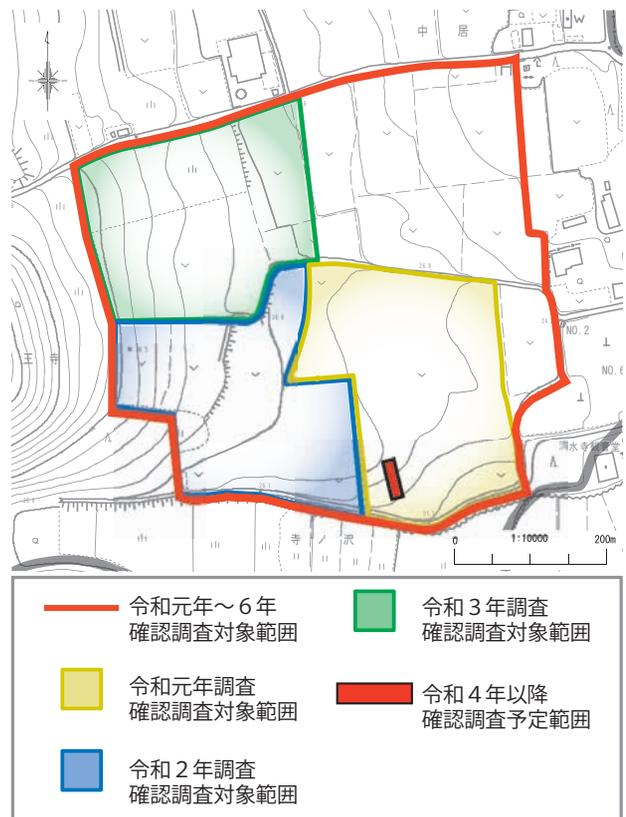
八戸市では平成9年度に史跡是川石器時代遺跡の整備を進めるため、是川縄文の里整備基本構想を策定した。これに基づき、遺跡の範囲と内容を確認するための発掘調査を実施し、3遺跡の範囲をほぼ確定することができた。本遺跡では、平成7～22年まで範囲・内容確認調査が断続的に行われてきた。

平成26・28・29年の3箇年には、集落域全体の土地利用を時期別に内容整理することを目標とし、昭和32年史跡指定地を中心に内容確認調査を実施した。

平成26・28・29年度の調査成果の一つ目は、一王寺貝塚の場所を特定し、貝塚の内容確認調査を行ったことである。貝塚の土壌に含まれた動物遺存体を分析した結果、貝殻ではイガイが最も多く見つかった。魚骨ではカツオ、マグロ属、ソウダカツオ属（マルソウダか）と



第1図 調査区位置図



第2図 調査計画図

いった外洋の回遊魚が目立って検出された。また、銚先や釣針などの骨角器が出土していることから、当貝塚を形成した人々は新井田川を下り、沖合におけるカツオ・マグロ漁などを直接的に行っていた可能性が高いことがわかった(杉山 2018)。

成果の二つ目は、縄文時代中期後葉の複数の竪穴建物跡を検出し、当該期の集落跡が昭和 32 年史跡指定地内に存在することを初めて確認したことである。

平成 29 年度は、遺跡の西側丘陵から中居遺跡の低湿地に注ぐ水脈を特定することを目的として調査を行い、中居遺跡の低湿地の漆製品や植物質遺物に注ぐ地下水脈の状態を確認した(横山 2018)。

(2) 令和元年度からの内容確認調査

先述のように、本遺跡では平成 7 年から 29 年にわたり断続的に内容確認調査が行われてきた。一方、当遺跡の総面積は 32 万 6 千㎡と広大であり、遺跡全体に対しての調査面積は約 2%にとどまっている。したがって、集落の全容を把握するまでには至っていないのが現状である。

このため、八戸市教育委員会では新たな調査計画の立案と調査方法を検討し、青森県教育委員会・文化庁との協議を開始した。青森県教育委員会・文化庁からの御指導・御助言をいただき、調査計画と調査方法を修正した。さらに修正した内容について整備検討委員会での了承を経て、平成 31 年度から 6 カ年の計画で、史跡指定地を中心に内容確認のための調査を行うこととなった。調査計画の概要は、第 2 図に示す。

Ⅲ．令和元年度の調査

(1) 調査概要

八戸市教育委員会は、史跡指定地内での内容確認調査を行うため、平成 31 年 4 月 23 日付けで文化財保護法第 125 条第 1 項に基づき、現状変更許可申請を提出し、令和元年 6 月 21 日付けで許可がおりた。調査期間は令和元年 7 月 4 日から 9 月 10 日、調査地点の所在地は八戸市大字是川字一王寺 1.2-2,2-3,2-5、調査面積は 400 ㎡である。

(2) 調査方法

調査を始めるにあたり、測量のための基準点を 2 箇所設置し(点名:GR1・GR2)、これを基準として調査予定範囲全体を網羅するグリッドを設定した(第 3 図)。グリッドは 50 × 50m の大グリッド、10 × 10m の中グリッド、3 × 3m の小グリッドを設定した。遺物の取り上げは各トレンチ名と小グリッド名を併記して行った。

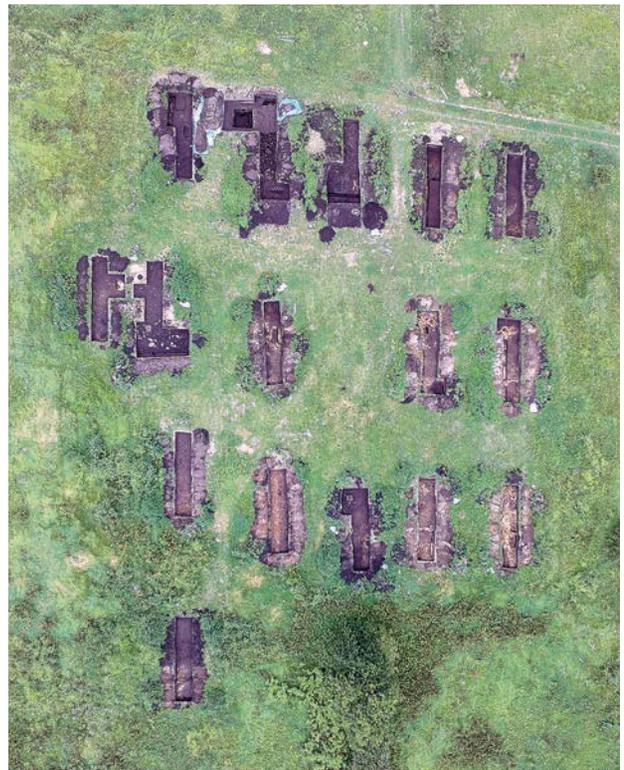


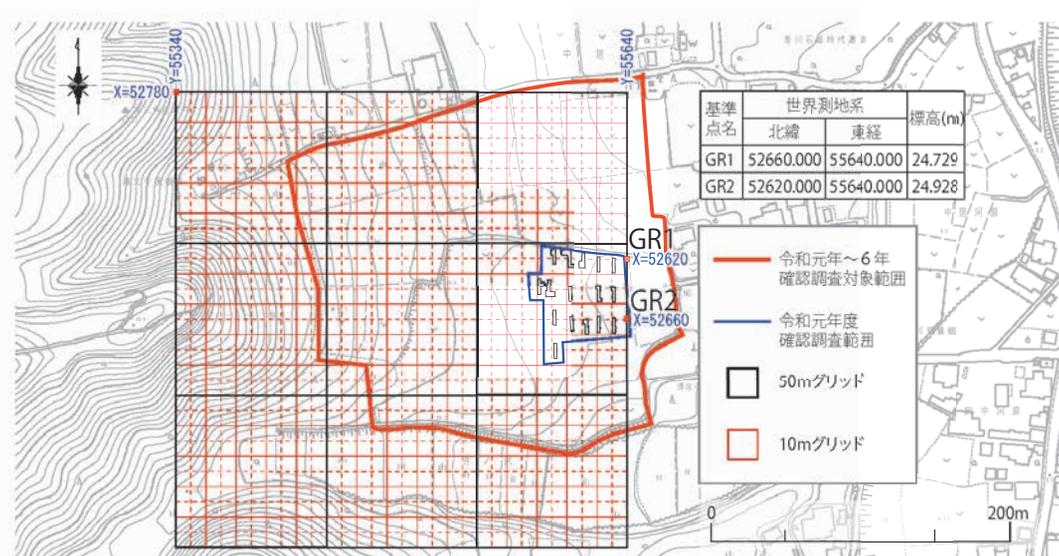
写真 1 令和元年度調査区全景(上が北)



写真 2 203 トレンチ北側旧調査坑(北から)



写真 3 203 トレンチ北側貝層断面(南から)



第3図 基準点およびグリッド配置図

調査は必要最低限の掘削面積に留めるため、トレンチ方式とした。今年度は2×10mを基調とした計16箇所のトレンチを設定し、調査を行った(第4図、写真1)。トレンチ名は過去の調査からの連番とした。

作業の効率化を図るため、表土掘削と埋め戻しは重機により行った。重機掘削に先行して表土の厚さを確認するため、各トレンチの両端に1×1mのテストトレンチを設定し、人力による掘削を行った。重機により表土を除去した後は、人力掘削による遺構検出を行った。遺構はプランを検出したのち、必要に応じて時期や性格を確認するためのサブトレンチを設定して精査を行った。

調査終了後は山砂で地山面を養生して埋め戻しを行い、地山を保護する措置をとった。

(2) 記録方法

トレンチ配置図はトータルステーションによる三次元測量、各トレンチの遺構平面図は簡易遣り方測量により作成した。また、遺構の有無に係わらず全てのトレンチで土層堆積状況の断面図を作成した。

(3) 調査指導

令和元年8月8日、史跡是川石器時代遺跡整備検討委員会のメンバーである岡村道雄氏・辻誠一郎氏・高田和徳氏の3名に発掘調査現場で調査方法等に関する御指導をいただいた。

また、令和2年2月13日に同一メンバーに令和元年度の調査成果の報告を行い、次年度以降の調査計画について御指導をいただいた。

(4) 公開活用

令和元年8月10日に史跡活用の一環として、小・中学生を対象とした発掘調査体験を実施し、計13名の参加があった。また、令和元年8月17日に一般の方を対象として遺跡の現地説明会を行い、26名の参加があった。



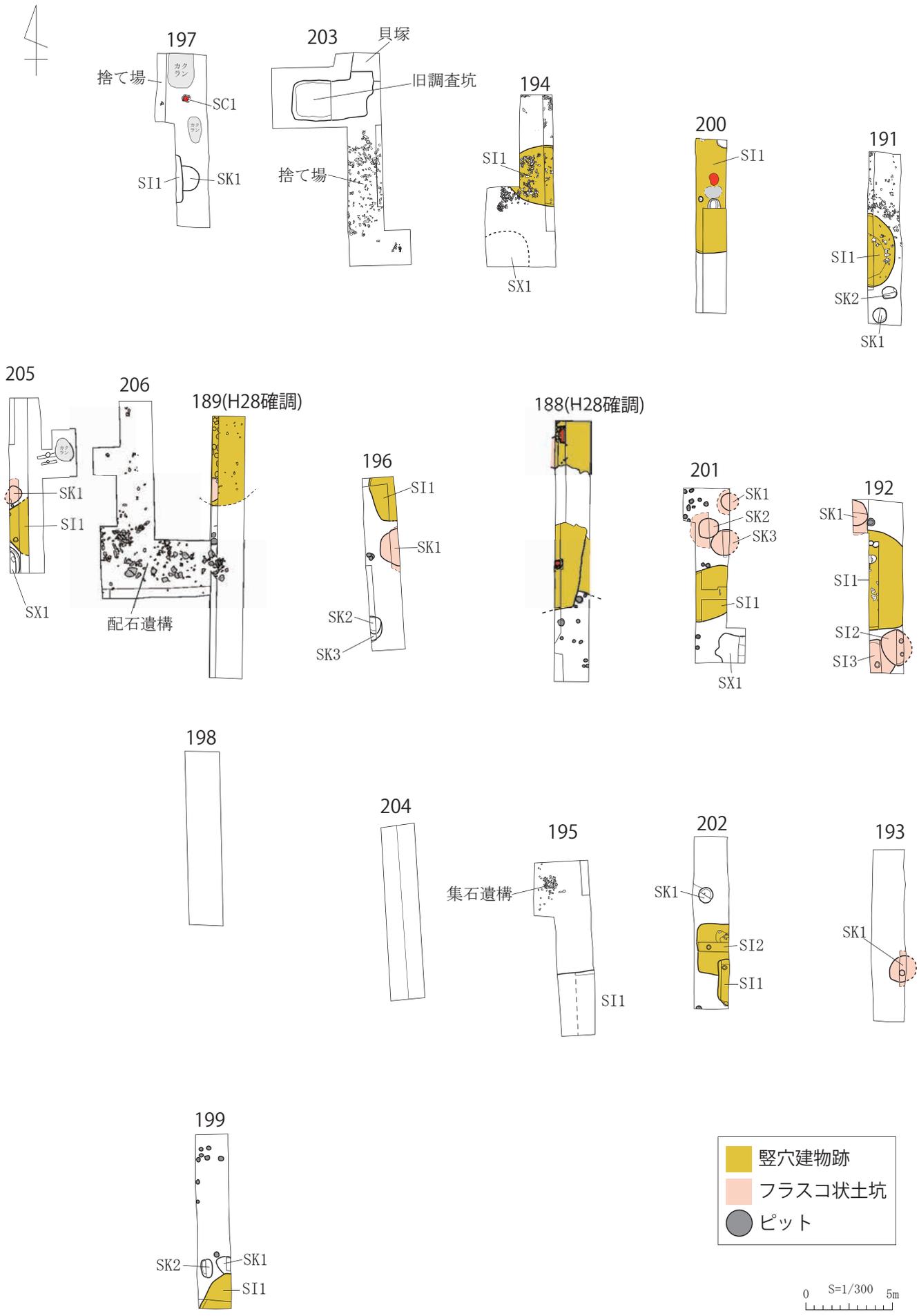
写真4 194トレンチ前期中葉～後葉の竪穴建物跡と凹地に形成された捨て場(南から)



写真5 194トレンチ前期中葉～後葉の捨て場遺物検出状況(東から)



写真6 194トレンチから出土した円筒下層式土器
※計測値の()は遺存値



第4図 令和元年度確認調査トレンチ配置図

IV. 検出遺構と出土遺物

(1) 検出遺構

・縄文時代前期

- 竪穴建物跡・・・1棟（前期中葉・円筒下層 a～c 式）
- 捨て場・・・・3箇所（前期中葉・円筒下層 a～c 式）
- 貝塚・・・・1箇所（前期中葉～後葉）

※ H26・28 調査と一連のもの

- フラスコ状土坑・・・2基（前期後葉・円筒下層 d1 式）

・縄文時代中期

- 竪穴建物跡・・・・11棟（中期中葉～後葉、
主に榎林式土器期）

- フラスコ状土坑・・・4基（中期前葉～中葉）

- 屋外炉・・・・1基（中期前葉～中葉）

・縄文時代後期

- 集石遺構・・・・1基（後期初頭～前葉）

- 配石遺構・・・・1基（後期初頭～前葉）

※ H28 調査 189 トレンチと一連のもの

・縄文時代

- フラスコ状土坑・・・1基

・時期不明

- 土坑・・・・8基

- 性格不明遺構・・・・3基

- ピット群・・・・2箇所

・古代

- 竪穴建物跡・・・・2棟

・その他

- 旧調査坑・・・・1基

(2) 出土遺物

縄文土器：早期（極少）・前期（多）・中期（多）・後期（少）・
晩期（少）、弥生土器：前期（少）、続縄文土器（極少）。
その他：土製品（土偶・土製耳飾り・キノコ形土製品・
ミニチュア土器・円板状土製品）、剥片石器（石鏃・石槍・
石匙・石筥・石錐など）、礫石器（磨製石斧・磨石・石皿・
台石・扁平石器など）、骨角器（釣針）、動物遺存体（ニ
ホンジカ・サメの歯など）。

V. 調査成果と今後の課題

(1) 調査成果

① 縄文時代前期の貝塚の広がりを確認

203 トレンチ北側で、旧調査坑を検出した（写真2）。
泉山岩次郎・斐次郎氏の残した調査記録から、両氏による
発掘調査坑とみられる。この埋め土には、多量の縄文
土器・石器のほか、獣骨・貝殻が含まれていた。埋め土
を除去したところ、壁面で貝層の堆積を確認した（写真3）。

203 トレンチの約 10 m 北には、平成 26・28 年度に



写真7 191 トレンチ S11 検出面の榎林式土器



写真8 写真7の復元個体



写真9 192 トレンチ S11 床面から検出された中期後葉の土器



写真10 写真9の復元個体

※計測値の（ ）は遺存値

おける内容確認調査で精査した貝塚調査区が位置している。両者の位置関係から、今回の調査でみつかった貝塚と平成26・28年度に調査した貝塚は、一連のものであると考えられる。これにより、貝塚の範囲がさらに遺跡の南側へ広がることを確認した。

また、貝塚の周辺には貝層を伴わない前期中葉から後葉の捨て場が形成されていることがわかった(194・197・203トレンチ)。捨て場の中には、竪穴建物廃絶後の凹地に形成されたものもあった(194トレンチSI1、写真4～6)。

②縄文時代中期後葉の集落跡を確認

調査区東側の191・192・199・200～202トレンチを中心に、中期後葉の竪穴建物跡が多数検出された。特に中期後葉の榎林式土器期のものが主体(写真7～10)であり、この時期に本遺跡の集落規模が最も大きくなったとみられる。

また、中期後葉の竪穴建物跡周辺では前期中葉から後葉の捨て場にみられた十和田中掘テフラの2次堆積層が検出されず、遺物包含層直下や遺構底面で八戸火山灰層に達する。このことから、中期後葉の集落形成時に大規模な地形改変が行われたことが考えられる。

③縄文時代後期初頭から前葉の遺構を確認

調査区西側で、後期初頭～前葉の配石遺構(195トレンチ、写真15)や集石遺構(206トレンチ、写真13・14)が検出され、生活空間の使い方に変化があらわれる。

(2) 今後の課題

①整理作業について

今回の調査で、635×390×175mmのトコ函で約50個分の遺物が出土し、出土遺物の洗浄及び接合作業を継続して行っている。

また、200トレンチSI1竪穴建物跡の覆土には焼けた獣骨片が含まれていたため、サブトレンチにより精査した範囲の全ての土壌をサンプリングした。土壌を水洗選別し、動物遺存体を抽出すれば、縄文時代中期後葉の動物利用の様相を明らかにできるものと期待される。

②年代測定結果について

192トレンチSK1、193トレンチSK1、201トレンチSK1・2、205トレンチSK1底面直上及び197トレンチSC1焼土中の炭化材の年代測定を、株式会社加速器分析研究所に委託した。その結果、縄文時代中期前葉から中葉の年代が得られた。この結果は、フラスコ状土坑群が中期後葉の竪穴建物跡よりも古く、両者が併存しないことを示す。今後、出土遺物の土器型式と併せて、各時期の集落構造について検討する必要がある。



写真11 192トレンチSI1～3竪穴建物跡検出状況(南から)



写真12 200トレンチSI1竪穴建物跡遺物検出状況(北から)



写真13 206 トレンチ配石遺構 (上が北)



写真14 206 トレンチ配石遺構 (左写真 ←、東から)



写真15 195 トレンチ集石遺構 (北東から)

<参考文献>

宇部 則保・横山 寛剛 2012 『史跡は川石器時代遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 135 集

横山 寛剛 2017 『一王寺 (1) 遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 157 集

横山 寛剛 2018 『史跡は川石器時代遺跡発掘調査報告書Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 164 集

杉山 陽亮 2018 「貝塚調査区の動物遺存体について」『史跡は川石器時代遺跡発掘調査報告書Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 164 集

報告書抄録

ふりがな	しせきこれかわせつきじだいせき						
書名	史跡は川石器時代遺跡						
シリーズ名	八戸市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 175 集						
編著者名	横山 寛剛						
編集機関	八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館						
所在地	031-0023 青森県八戸市大字是川字横山 1 番地						
発行年月日	令和 2 年 (2020) 3 月 27 日						
所収遺跡名	所在地	遺跡番号 コード	世界測地系		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
			北緯	東経			
一王寺遺跡	八戸市大字是川字一王寺 1.2-2.2-3.2-5	203014	40° 28' 25"	141° 29' 13"	20190704 ~ 0910	400	内容確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な出土遺物	特記事項		
一王寺遺跡	集落跡	縄文 (前・中・後)	竪穴建物跡 14 棟、土坑 15 基、屋外炉 1 基、配石遺構 1 基、集石遺構 1 基、性格不明遺構 3 基、捨て場、貝塚、ピット	縄文土器 弥生土器 統縄文土器 土製品 石器 骨角器 動物遺存体	今回の調査において、平成 26・28 年度調査の縄文前期中葉～後葉の貝塚が、遺跡の南側へ広がること、貝塚周辺に貝層を伴わない前期の捨て場が存在することを確認。また、縄文中期後半の遺構が多数検出され、この時期に本遺跡の集落が最も大きくなったとみられる。さらに、縄文後期初頭～前葉に配石遺構や集石遺構がつけられることがわかった。		

表紙 - 令和元年度調査区全景

八戸市埋蔵文化財調査報告書第 175 集
八戸市内遺跡発掘調査報告書 41
史跡は川石器時代遺跡内容確認調査概報

発行日 2020 年 3 月 27 日
発行 八戸市教育委員会
〒 031-8686 青森県八戸市内丸一丁目 1 番 1 号
TEL 0178 (43) 2111 代表

編集 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館
〒 031-0023 青森県八戸市大字是川字横山 1 番
TEL 0178 (38) 9511

印刷 有限会社協同印刷
〒 039-1101 青森県八戸市尻内町字尻内河原 49-1
TEL 0178 (27) 4134

印刷部数 300 部 印刷経費 1 部あたり 660 円